

白銀の城の新たな"おもてなし" ～淫紋焼饅の甘い罠～

城の最奥、主である白銀の城のラビュリンス以外には、その存在すら知られていない一室。表向きは、彼女が日夜開発に勤しむ新たな「罠」の性能をテストするための部屋という事になっている。だが、その扉が敬愛するマスターを迎えるためだけに開かれる時、この部屋はその真の姿を現すのだ。すなわち、主と客人が、ただひたすらに愛を確かめ合うためだけに存在する、甘美で倒錯的な空間——『ラブルーム』へと。

壁一面を埋め尽くすのは、これまでにラビュリンスが生み出してきた無数の「おもてなしの道具」。それらは決闘で使われる罠カードのレプリカのようにもあり、しかしその形状や機能は、どれもが一目で人を官能の淵へと誘うために作られたものだとなる。天井から吊るされたシャンデリアは、蝋燭の炎を模した魔導光が頼りなげに揺らめき、部屋の隅々に深い影を落としていた。

その部屋の中央に、まるで祭壇のように鎮座する巨大な円形のベッド。幾重にも重ねられた天蓋の薄絹は、向こう側が透けて見えるほど繊細で、ベッドの上に敷き詰められたベルベットのシーツは、熟れた果実を思わせる深く艶めかしい深紅色に染まっている。これからこの場所で繰り広げられるであろう、濃密な愛の儀式を予感させ、静かにその時を待ち構えていた。

そのベッドの縁に、ラビュリンスはマスターと二人、寄り添うように腰掛けていた。つい先ほどまで、新作の罠『淫紋焼饅(いんもんやきごて)』のプレゼンテーションを意気揚々で行っていたハイテンションな彼女は、今やその頬をほんのりと上気させ、期待と、そして初めての試みに対する少女のような純真な緊張が入り混じった、甘くか細い吐息を繰り返している。

「ふふ……♥ さあ、マスター♥ どうぞ、始めてくださいまし。このわたくしの全ては、いついかなる時も、あなた様のためだけにあるのですから……♥ あなた様の、お好きなように……♥」

潤んだ紫水晶の瞳が、すぐ隣に座るマスターの顔を、まるで祈るように見上げる。マスターは何も言わない。だが、ラビュリンスを見つめ返すその黒い瞳の奥に、確かな熱と欲望の光が宿っているのを、彼女は見逃さなかった。こくり、と彼が小さく頷く。ただそれだけの仕草で、彼の承諾と、そして彼もまたこの倒錯的な実験を心から望んでいるのだということが、ラビュリンスには痛いほど伝わってきた。

ああ、愛しい、愛しいお方。このわたくしが捧げるもの全てを、あなたは受け入れてくださるのね。その事実だけで、ラビュリンスの心は歓喜に打ち震え、体の奥底からじわりと熱が込み上げてくるのを感じた。

マスターの指が、ゆっくりと、まるで貴重な芸術品に触れるかのように、ラビュリンスの纏う純白のドレスの肩紐へと伸びる。185cm という長身瘦躯でありながら、女性的な丸みを帯びた彼女の肩。その滑らかな素肌にマスターの指先が触れた瞬間、ラビュリンスの体は「びくんっ」と可愛らしく、そして官能的に震えた。

熱い。ただ触れられたただけだというのに、まるで体中の血液が沸騰して、触れられた一点に奔流となって流れ込んでくるかのような錯覚。背筋をぞくぞくと甘い痺れが駆け上がり、思わず吐息が漏れる。

するり、と。一条の絹がその重みを失い、滑り落ちていく。マスターの巧みな手つきによって、ドレスはまるで生き物のように彼女の体から剥がされていった。現れたのは、彼女のその規格外の肉体をкаろうじて覆い隠す、繊細なレースで彩られた純白のランジェリー。

とりわけ、見る者の視線を釘付けにして離さないのは、その胸元だった。B135、Q カップという、もはや神の悪戯としか思えないほどの豊満な乳房。それは薄い布一枚の下で、今にもその束縛を振りほどいて弾け飛びそうなほどの圧倒的な質量感を誇示している。その中央に刻まれた深く、暗い谷間は、一度でも視線を落としてしまえば、二度と這い上がれない甘美な奈落のように、見る者の理性を吸い込んで蕩かしてしまうほどの蠱

惑的な魅力を放っていた。

マスターは言葉を発しない。だが、彼の行動の一つ一つが、どんな雄弁な愛の言葉よりもラビュリンスの心を掻き乱し、官能の炎を煽っていく。彼の温かい手がラビュリンスの背中に回り、ブラジャーのホックに触れた。決して急ぐことなく、焦らすように、そして慈しむように、一つ、また一つと、小さな留め具が外されていく。

ぷつり、ぷつり、と。静かな部屋に響くその微かな音が、ラビュリンスにとっては処刑台へと上る階段の音のようでもあり、同時に、至上の楽園への扉が開く音のようでもあった。一つのホックが外れるたびに、背中を走る痺れはより強く、より甘くなっていく。

そして、三つの留め具が全て解放された、その瞬間。長きにわたる窮屈な圧迫から解放された二つの巨大な果実が、まるで自らの意思を取り戻したかのように、重力と物理法則にその豊かな身を委ねた。

「んんうう……っ♥」

ぼふんっ、と。空気と、柔らかな肉がぶつかり合う、豊満で湿った音が響く。二つの白い山脈は、解放の喜びに打ち震えるかのように、たゆん、と大きく、そして官能的に揺れた。自らの重みでわずかに垂れ下がりながらも、その圧倒的な張りと弾力は失われていない。その山頂に宿る、瑞々しい薄紅色の蕾は、すでにぷるぷると震えながら硬く尖り、マスターの視線と指先を欲しくてたまらないのだと、雄弁に物語っていた。

マスターの大きな掌が、その片方——ラビュリンスから見て左側の乳房を、まるで壊れやすい宝物を扱うかのように、しかしそのずっしりとした重さを確かめるように、そっと下から支えた。

「ひゃうっ……！♥ あ、あたたかい……あたたかいですわ…♥ マスターの、お手々が……わたくしのお胸を……♥」

全身の力がふっと抜け、ラビュリンスはうっとり目を閉じる。支えられた左の乳房。

神が丹精込めて創りたもうた最高傑作とでも言うべき、完璧な円錐を描くその柔らかな丘は、マスターの掌の上で、まるでその形を覚えてもらおうとするかのように、心地よさそうに輪郭を変えた。

それだけの愛撫で、ラビュリンスの腰の奥がきゅうんと甘く疼き、秘裂の入り口から、とぶりと濃密な愛の蜜が一滴、深紅のシーツの上に小さな染みを作った。

マスターは、乳房を支えていない方の手で、傍らのベルベットの上に恭しく置かれていた『淫紋焼鑊』を手を取った。柄に施された精緻な銀細工が、蠟燭の魔導光を不規則に反射して、きらり、きらりと妖しく光る。そして、マスターがその意識を集中させると、鑊の先端に取り付けられたハート型の金属部分が、まるで魔法のランプに生命が宿ったかのように、ぽうっと、官能的なピンク色の光を放ち始めた。

じりじり、と空気を焦がすような、しかし不思議と不快ではない、蜜のように甘い匂いを伴った熱が、その小さなハートから放射される。

「あ……♥ ああっ……♥ き、来ますのね……♥ いよいよ、このわたくしの体に……わたくしの、新しい『おもてなし』が……♥」

ごくり、とラビュリンスの喉が鳴る。怖い。ほんの少しだけ。どれだけ理論上は安全だとわかっていても、熱した金属を自らの柔肌に押し当てられるのだ。痛みがないはずがない。……いや、違う。この淫紋焼鑊の最大にして唯一の効果は『痛覚信号の完全なる快楽信号への強制変換』。ならば、これからわたくしを襲うのは、痛みなどというちっぽけなものではなく、この世のどんな媚薬も及ばぬほどの、至上の快楽のはず。自分で設計したのだから、間違いない。間違いない、はず……。

ほんのわずかに不安に揺れる心を悟ったのか、マスターは焼鑊を近づけるのをぴたりと止め、代わりにラビュリンスの額に、自らの額をこつんと優しく合わせた。彼の落ち着いた、それでいて奥底に灼熱の情欲を隠した呼吸が、ラビュリンスの顔にかかる。大丈夫、心配いらない、とでも言うように、マスターの指が彼女の美しい白銀の髪を、そっと

優しく撫でた。

「……♡ マスター……♡ ふふ、ありがとう、ございますわ……♡ もう、わたくしったら、少しだけ怖気づいてしまいましたの。でも、もう大丈夫ですわよ♡」

その不言の優しさだけで、心の隅に巣食っていた不安の靄など、朝日を浴びた霧のように綺麗さっぱりと消え去ってしまった。このお方が側にいてくださる。このお方が、わたくしを求めてくださる。その事実さえあれば、たとえこの身が灼熱の業火に焼かれようとも、それはきっと、わたくしにとって無上の悦びとなるに違いない。

ラビュリンスは、うっとりとした表情で再びマスターを見つめ返し、愛と信頼を込めて小さく頷いた。さあ、早く。早く、あなたの熱い『わな』を、このわたくしに刻んでくださいまし。

マスターは再び淫紋焼鑊を構え、その淡く、しかし妖しく輝くハートの先端を、ラビュリンスの豊満な左胸へと、ゆっくりと、まるでスローモーション映像のように、近づけていく。

熱い。空気を介しているだけでも、肌がじりじりと焼かれるような鋭い熱を感じる。肌の表面にある産毛が、音もなくちりちりと縮れて消えていくような錯覚。ラビュリンスは知らず知らずのうちに、ベッドのシーツを両手で強く、強く握りしめていた。心臓が早鐘のように胸骨を内側から叩き、呼吸は短く、浅くなる。

そして。

ついに、官能的なピンク色に輝くハートの先端が、Q カップの柔らかな丘の、その頂点より少しだけ上の、最も肉付きが良く滑らかな素肌へと、触れた。

ジュウウウウウウウウウウウツツツ！！！！

「————ツツツ！！！！！！！！」

声にならない絶叫が、ラビュリンスの喉から迸った。

いや、それは絶叫というよりも、魂そのものが快感に耐えきれず、肉体という檻から解き放たれようとする咆哮だった。

それは、痛み、ではなかった。

断じて、痛みではなかった。

もし、この世に存在する全ての快感を、ありとあらゆる種類の性的興奮を、一滴残らず集めて凝縮し、圧縮し、そして灼熱のプラズマと化した奔流として、脳髄に直接流し込んだとしたら、きっとこのような感覚になるのだろう。そうとしか表現できない、人間の理解の範疇を完全に超越した情報の洪水。

肌を焼く灼熱。その熱は一瞬にして彼女の痛覚神経を焼き切り、しかしその断末魔の信号が脳に届くよりもコンマ数秒早く、淫紋焼鑊の魔力がそれを捕らえ、何万倍にも増幅されたエクスタシーの電気信号へと強制的に変換する。

肉が焼ける音と匂い。それは本来、生物としてプログラムされた根源的な恐怖と危険信号を呼び覚ますはずの情報。だが、このラブルームにおいては、その恐怖心すらも、背徳的で倒錯した興奮を増幅させるための最高のスパイスへと成り果てていた。

脳が、白い。

視界が真っ白に染まり、明滅を繰り返すピンク色の光だけが、網膜の裏側に強く、強く焼き付いている。思考が融解し、自分が誰で、ここがどこで、何をされているのかさえ、一瞬にして忘却の彼方へと消え去った。あるのはただ、快感、快感、快感。それ以外の全てが無意味と化す、絶対的な感覚の奔流。

「あ、あ、あ、あ、あああああああああああああああああッッッッ！！！！！！

♥♥♥♥♥」

全身がベッドの上で巨大な弓と化す。しなやかな背中が、あり得ない角度で限界まで反り、指の先から足の爪先までが硬直して、びくびく、びくびくと激しい痙攣を繰り返した。それはもはや、オーガズムなどという生易しい言葉で表現できる現象ではなかった。ラビュリンスという存在そのものが、快感という概念によって根こそぎ上書きさ



れ、塗り替えられていくような、絶対的で抗いがたい支配だった。

焼鑊が押し当てられた左胸。そこから、ピンク色の波動が同心円状に全身へと広がっていくのが、肌で感じ取れる。心臓が、まるでマスターに直接驚掴みにされたかのように、どくん、どくん、と激しく脈打ち、その暴力的なまでの鼓動に合わせて、快感の波が何度も、何度も、ラビュリンスの全身を打ち据えた。

「い、いやああああっ！♥む、りい！むりむりむりむり！♥こ、こわれ、ますわあああああああああッッッ！！！」

その時だった。

快感の頂点の、さらにその先で。硬く、硬く勃ち上がっていた左の乳首が、きゅううううっと信じられないほど強く、内側に向かって収縮したかと思うと、その先端から、まるで決壊したダムのように、純白の液体が凄まじい勢いで射出された。

ピュウウウウッ！ ピュッ、ピュッ、ピュウウウッ！！

「んっぎiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiッッッ！！！！♥♥♥♥♥♥」

射乳。男性の射精がごとく、しかしそれとは比較にならないほどの勢いと量で、甘く芳醇な香りを周囲に振りまく母乳が、幾条もの白い放物線を描いて宙を舞った。それは、驚きに見開かれたマスターの顔や、その逞しい胸板に、淫らな白い飛沫となって降り注ぐ。自分の体から、こんなものが、こんな勢いで。その羞恥と驚愕、そして背徳感が、更なる快感の起爆剤となり、ラビュリンスを意識の途絶える寸前まで追い詰めた。

絶頂の痙攣は、まだ収まらない。脳が快感の洪水から回復できずにショートしている。母乳は未だ止まらず、ぴゅっ、ぴゅっ、と断続的に射出され続け、ラビュリンスの真っ白な腹や、マスターの足元、そして深紅のシーツの上に、いくつもの白い水たまりを作っていく。

どれほどの時間が経ったのだろう。ほんの数秒か、あるいは永遠と感じられるほどの時間か。ようやく全身を苛んでいた嵐のような痙攣が少しずつ収まり始めると、ラビュリンスは「はっ、

はっ、はう……っ」と、魚が陸で喘ぐようなか細い呼吸を繰り返しながら、ぐったりとベッドの上に沈み込んだ。全身の骨が、快感の熱で融解してしまったかのように、全く力が入らない。快感の圧倒的な余韻が、まだ体の隅々でびりびりと痺れのように残り、彼女を現実世界に繋ぎ止めることを拒んでいた。

焦点の合わない紫水晶の瞳で、ぼんやりと天井の豪華な装飾を見上げる。

(な……ななな、なんで、すの……？ これ、は………？)

自分の身に何が起きたのか、すぐには理解が追いつかなかった。ただ、焼けるような、それでいて甘露のような、凄まじい快感に襲われ、絶頂し、そして、母乳を撒き散らした。その衝撃的な事実だけが、まだショートしている脳裏に、何度も何度もリフレインしている。

(わ、わたくしの……発明品……？ わたくしが、この手で、マスターをおもてなしするために、作った、罠…？)

恐る恐る、自分の左胸に視線を落とす。そこには、先ほどまで何もなかったはずの滑らかな肌の上に、美しくもどこまでも淫らな、ハートの形をした紋様が、まだ淡いピンク色の光を保ちながら、まるで第二の心臓のように、どく、どくと脈打つように明滅していた。

(こ、こんな…効果だったなんて……。聞いてませんことよおおおっ！？)

設計したのはこの自分自身だというのに、そのシミュレーションや理論値を遥かに、遥かに上回る威力に、ラビュリンスは作った本人でありながら、本気で目を白黒させていた。これはもはや「おもてなし」の領域を完全に逸脱している。もし何も知らないお客様にこれを使えば、快感のあまりショック死してしまうかもしれない。これは……もしかして、とんでもない失敗作……？

あまりの衝撃に、ラビュリンスはさあっと顔から血の気が引くのを感じた。せっかくマスターに良いところをお見せしようと思ったのに。これではただの暴走した危険物では



ないか。マスターは、きっと呆れて、がっかりなさってしまったに違いない。

そんな不安に駆られ、おずおずと、叱られるのを待つ子供のようにマスターの顔を窺い見た、その瞬間。

ラビュリンスは、息を呑んだ。

マスターは、言葉こそ発しない。

だが、その表情は、その瞳は、その全身は、この世のどんな雄弁な言葉よりも、彼の感情を物語っていた。

荒い呼吸。普段の落ち着き払った彼からは想像もつかないほど、肩が大きく上下している。その瞳は、驚きと、そしてそれ以上に強烈な熱に浮かされたように爛々と輝いていた。その視線は、淫紋が刻まれたラビュリンスの左胸と、そこから今もなお、ぽたり、ぽたりと滴り落ちる母乳、そして快感に蕩けきって放心する彼女の表情とを、まるで獲物を前にした飢えた獣のように、貪るように行ったり来たりしている。

そして、ラビュリンスを射抜くその視線には、失望の色など微塵もなかった。

そこにあるのは、純度百パーセントの、何のフィルターもかかっていない、剥き出しの——『興奮』。

マスターの指が、自らの胸板にかかったラビュリンスの母乳を、そっとすくい取る。そして、まるで極上の蜜を味わうかのように、その指先を、ぺろり、と舐めとった。その一連の仕草が、あまりにも、あまりにも扇情的で。

ラビュリンスは、悟った。

(あ……………あ……………♥)

ああ、ああ、ああ！ なんてこと！ なんて、素晴らしいこと！

(マスターが……………喜んで、くださっている……………♥)

この、常軌を逸したわたくしの姿を見て。

自分の発明品で快感の限界を超えてめちゃくちゃにされて、あられもない声を上げ、母乳を撒き散らすという、この上なく破廉恥で、淫らな姿を見て。

この、わたくしが世界で一番敬愛するマスターが。

(興奮、して……くださって、いる……………♥♥♥♥)

その事実を完全に理解した瞬間、先ほどまでの驚愕や恐怖、失敗作かもしれないという不安は、全てが歓喜という名の溶鉱炉で融解し、純粋な愛と、マスターに身も心も捧げる奉仕の悦びへと、見事に昇華された。

そうだった。わたくしは何のために、この罫を作ったのか。

マスターに喜んでいただくため。マスターに、もっと愛していただくため。マスターに、もっと、もっと、このわたくしの体を求めてもらうため。

ならば、これは失敗作などではない。これこそが、わたくしが心の底から求めていた、最高の、究極の『罫』ではないか。

(もっと…♥ もっと、このお方を悦ばせたい…♥ このわたくしの全てで、このお方を、身も心も、めちゃくちゃにして差し上げたい…♥)

ぐったりとしていた体に、新たな力が、熱が、まるで泉のように湧き上がってくるのを感じる。

虚ろだった紫水晶の瞳に、再びとろりと甘く、それでいて爛々とした妖しい光が宿った。

ラビュリンスは、ゆっくりと、しかし、確かな意志を持って、そのまだ快感の余韻で震えるか細い腕を伸ばした。そして、マスターの手を取り、まだ淫紋が刻まれていない、清らかなままの右の乳房へと、その手を優しく、しかし抗いがたい力で導いた。

まだ熱と快感で痺れている唇が、熱い吐息と共に、甘く、蕩けきった声で囁きを紡ぎ出す。

「マスター…………♥ す、ごい、ですわ…♥ こんな、本当に、初めて…♥ 脳みそが、とろとろに蕩けて…♥ 体が、言うことを聞いてくれませんの…♥」

うっとり目を細め、マスターの大きな手に自らの頬をすり寄せる。まるで甘える子猫のように。

「でも…♥ でも、見てくださいまし…♥ あなた様が、そんなにも熱い目で、そんなにも興奮したお顔で、このわたくしを見てくださるから…♥ わたくし、もっと、もっとになってしまいますの…♥」

導かれたマスターの手が、言われるがままに右の豊満な丘を優しく包み込む。その温かく、力強い感触に、ラビュリンスは恍惚の吐息を漏らした。

「ねえ、マスター…♥ こちら側も…♥ とっても、寂しがって、おりますわ…♥ 左だけじゃ、可哀想ですもの…♥」

左胸に刻まれた淫紋が、まるで彼女の言葉に嫉妬するかのように、ひときわ強く、官能的なピンクの光を放った。

「あなた様の、あの熱い、熱い刻印で…♥ このわたくしの両胸を、あなたの甘い罠の証で、いっぱいにしてくださいまし…♥ そして、もっと…もっとめちゃくちゃに乱れるわたくしを見て…あなた様も、もっと、もっと興奮してくださいな…♥ ね…？♥ お願い、ですわ…♥ マスター……♥」

それは、懇願であり、誘惑であり、そしてラビュリンスからの、これ以上ないほどに純粋で、そして淫らな愛の告白だった。

その甘いおねだりを、マスターが断る理由などあろうはずもなかった。彼は言葉なく、しかし力強く頷き返す。そして、再び『淫紋焼鏝』を手に取り、そのハートの先端に、先ほどよりもさらに強い、燃え盛るような情欲のピンク色の光を灯すのだった。

次なる灼熱の快楽を前にして、ラビュリンスはもはや恐怖など微塵も感じていなかった。ただ、愛する人の手によって、再び未知の絶頂へと導かれる至上の喜びを、その全身全霊で、心から待ち望んでいるのだった。